幻想は儚き彼女の為に

風のお守り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想は儚き彼女の為に

【Ｎコード】
Ｎ８４４２Ｎ

【作者名】
風のお守り

【あらすじ】
オリキャラの幻想入り小説です。

お別れは胸に抱いて

幼い頃の約束を僕、双葉広一はまだ覚えている。風祝と表裏一体を成し、風を以て風祝に逆らうものを屠る者の存在を。そして、天を司り軍神と呼ばれる気高き神、八坂神奈子さんに言われたあの言葉。

――早苗が風祝になったら、お前は早苗を守る存在、風屠（かぜほふり）になってくれ。

そしてもう一柱、大地を司りミシャグジと呼ばれる清廉たる神、洩矢諏訪子さんもこういった。

――君になら、任せてもだいじょぶだねっ！

と。そう言われたのが十年前。今の僕は受験勉強に追われる十七歳の立派な高校三年生だ。結局、風屠とやらになれてはいない。十年前は早苗を護れるということで軍神直々に色々と叩きこまれた事も無意味だった。

しかし、見事風祝となった彼女、東風谷早苗はというと、今は諏訪大社で巫女をしている。学校ではクラスメイトにお守りを売ったり、休日は神社で掃除と修行に明け暮れている。

風祝になったのに、更に修行する理由は至極簡単で、諏訪大社の二柱、神奈子さんと諏訪子さんが信仰の激減により存在を保てなくなったらしい。今は数少ない信仰と早苗の必死の神力で繋ぎとめているだけらしい。

神奈子さんに教えられた事も、風屠になれなかったことも、信仰心のせいなのだ。だから、幼い頃は触れ合い楽しんだ彼女達も、遂に僕に構う余裕がなくなったのだ。

そして幼馴染みだった僕と早苗にも変化が起きた。いずれ訪れる別れの寂寞を緩和するために、僕は早苗と距離を取っていた。そして最近になって『幻想郷』という所に諏訪湖と諏訪大社ごと引っ越すのだそうだ。『幻想郷』でもう一度仕切り直し、二柱の力を取り戻すらしい。

けどそこに、早苗の隣には――それは当然であり、間違いはないのだが――僕は居ない。一緒に幻想郷に行ったところで、無力な学生が何か出来る訳はないのだろう。きっと。

「はぁ……」

窓際の席の机に頬杖を突いて、憂鬱そうに溜め息を吐いた。更にぼんやりと外を見渡していた僕は、相当絵になっただろう。嘘だ。なる訳ない。

「双葉君、どうしたんですか？」

視線で無意識にサッカー部の友人を視線で追っていたら、突然声を掛けられた。穏やかな声で、それでいて良く通る澄んだ声。この声の持ち主は僕がよく知っている彼女の声だ。

視界に入ったのは早苗本人だった。腰まで伸ばした美しい緑の髪。吸い込まれそうな大きな碧眼。全体的に大人しそうでほっそりとしている。ふんわりとした雰囲気で周りの人間を癒す空気を醸し出しているのは彼女が現人神であるからか。それの力も相まってか、多数の男子高校生を恋の病に叩き落としたものだ。

「いや……東風谷さんともうすぐお別れなんだなって」

苦笑を混ぜながら言った。早苗は寂しそうに微笑んだ。早苗は微笑する癖が昔からある。困った時も、悲しい時も、嬉しい時も。

そんな彼女に僕も恋をしては居る。けれど、雰囲気とか顔立ちとかそんなものじゃあなかった。もっと奥の方から、彼女に惹かれていたんだと思ってる。

「そうですね……神奈子様と諏訪子様があれほどに力をおとされるとは思いもしませんでした」

「僕もだよ。時代の流れってやつだね、東風谷さん」
僕の言葉に早苗は何とも言えない表情を浮かべた。無理矢理笑おうとして失敗した、そんな崩れた表情だった。
僕としてもそんな表情をする早苗を見たくはなかった。あの二柱と一緒に幸せそうに笑う早苗の顔が一番なのだから。
「あの、今日は一緒に帰りませんか？　双葉君、部活休みですよね、確か」
早苗の表情が一変して明るくなると、それに伴い唐突に話が変わった。話の筋をぶった切る事はなかった早苗にしては、随分らしくない珍しい事だった。
そうはいっても、確かに今日は部活は休みだ――けどなんで帰宅部の早苗が陸上部の予定を知ってるんだ？　普通は他人の部活がいつ休みかだなんて知っている訳はないはずだけど。
「そうだけど――」
「良かった！　じゃあ一緒に帰ろう！」
言いかけた　僕のセリフも　奪われた――双葉広一、心の俳句。
明るくなった表情から、今度は大輪の向日葵が咲くように綺麗な笑顔を咲かせた。僕としては嬉しいことではあるけれど、反面的に意識して彼女と距離を取っていた僕は少し複雑だった。
それに僕の親友――腐れ縁とも呼べる『アイツ』と出掛ける予定だったんだけどなぁ。断ろうか――。
そこまで考えると、突然やかましい声が降り注いだ。
「お、早苗さん。広一なら今日暇だってよ。一緒に帰るなりン煮るなり焼くなりなんなりしてやってくれよ！」
声の発生源を振り向かなくても解る。秋庭敏明（あきばとしあき）、僕の親友で悪友だ。彼とも幼馴染みであり、僕にとっては相棒の様な存在だった。ちょっと揚げ足取りなところもあるけど、憎めない良い奴なのは僕がよく知ってる。
「広一はなんか高校入ってから変わっちゃってさ、三年そのまんま。早苗さんも知ってるだろ？　ここで一発逆送り狼でも良いんだぜ！」

自分は関係ないと思って好き勝手言うけど、ホントは良い奴だ。
「しけた面してるからエロ本貸したら、目の色変えたこいつを逆送り狼に――」
「うっさい！！」
僕は遂に机の上にぽつんと置いてあった筆箱を掴むと、思い切りあいつの顔面にぶん投げた。中学の頃は中堅手で肩には自信があった。
「おっ、くれるのか？」
難なくキャッチされては形無しだ。僕も陸上部にうつつを抜かしていたらしい。焼きが回ったか。
「明日返せよ！」
「そんときお前は童貞卒業か！」
こんな奴だけど、良い奴なんだ。
僕と敏明の漫才が終わると、早苗はくすくす笑って言った。
「二人は変わらないね。羨ましいよ」
くすくす笑うその表情の中に、僕は羨望の色が混じっていたのを見た。ただ、なぜなのかは解らない。
すうっ、と大きく息を吸い込む早苗。
「――ありがとう敏明君！　さあ、行きましょう双葉君！」
突然手を掴まれた僕は、思わず胸が高鳴った。目の前にはにっこりと笑う早苗の姿。
あ、あれ？　早苗ってこんなに積極的だっけ……？
僕は早苗に急かされるまま、空に近いお洒落なリュックサックを背負って、教室を出て行った。手首を掴まれて早苗に引きずられながら振り向いた僕に、敏明はニヤッと笑顔を浮かべていた。明日会ったらエルボー叩きこんでやる。覚えてろ、ありがとう。

秋の夕暮れは意外に早い。諏訪市は長野県の中でもかなり都市部だけど、山間の近くで夕暮れが早いのは確かな事。辺りはもう朱色に染められて、頭の上の大空も真っ白だった雲もオレンジ色に染ま

っていた。澄んだ空気に夕焼けはよく映える。
早苗と僕は中学の半ばまでは、いつも一緒に歩いた長い道をまた一緒に歩いてる。川辺の近くには電車がうるさく喚きながら通り過ぎていく。鬱陶しいはずのそれは早苗にとっても想い出の一つ一つになるんだろうか。それとも『幻想郷』に全てを塗りつぶされてしまうのだろうか。そこまで僕に推し量ることは出来ない。邪推というものだ。
「一緒に帰るの、久しぶりだね」
肩を寄せながら歩く僕ら。天使の様な微笑みを浮かべながら、早苗は僅かに頬を朱に染めていた。
「うん、そうだね。……えっとさ、神奈子さんと諏訪子さんは、どう？」
変にどもってしまって、更に上手い話題が見つからない。機転の効かない僕の頭が弾き出した話題は、結局二柱の話になってしまう。情けない男、双葉広一。
「双葉君に姿は見えますか？　二柱のお姿が……」
俯く早苗。いけないことを聞いてしまう僕。そう思うのが遅すぎた。後の祭りだ。仕方なく、僕は無言で首を横に振った。
僕の心境を慮ったのか。早苗は気丈そうに両腕をぶんぶん回して言い聞かせるように答えた。
「でも、幻想郷で再起を図るんです！　私が信仰を集めて、お二人を元通りにするんですよ！」
「うん、そっか。僕も手伝えたら良いんだけど、幻想郷までは行けないよ。残念」
「あ……」
またしょんぼりと早苗は俯いてしまう。しまった、またアホなことを言ってしまった。今日の僕はどうも変だ。なんで早苗の言うことに微妙に噛みつくんだろう。
気まずい沈黙がのしかかり、僕は打開策を探す。
「東風谷さんと別れるのは寂しいけど、僕は君のこと忘れないよ、

絶対に」
口を突いたのは別れの言葉。いったい何考えてるんだろう、僕。
くだらないはずの話題に、早苗は思った以上に食いついた
「……わ、私も！　双葉君のことは忘れたくないの！」
少し引っかかるような言い方だった。まるで第三者の力に強制的に記憶を消されるような言い方だ。
「東風谷さんが忘れたくないなら、忘れないよ、きっと」
「あ、うん……そうだよね、そうですよね！」
どちらかというと、早苗は自分自身に言い聞かせるように言っていて、それに答えるべきなのか、もっと深く突っ込んでみるべきなのか。何故か逡巡してしまった。
「あ、じゃあ、えっと、私は、こっちなので！　し、失礼します！
また明日っ！」
僕が口を開くより、先手を打ったのは早苗だった。急に何を思ったのか。早苗は僕から離れて切羽詰まったように笑って言った。触れれば壊れてしまいそうな笑顔だった。
ぞわっ、と僕の中を何かが駆け抜けた。今ここで何かしないと一生後悔すると心が言った。そんな気がした。
すると思わず僕の喉から勢いよく声が飛び出していた。それも早苗を呼び止める意味の言葉だった。
「待て！　待てよ早苗！」
カンカンカンカン！　と僕の背後の踏切がけたましく喚いて人間に危険を知らせる。それより大きな声が出たんだ、きっと本能的に叫んだんだろう。
たっぷり一分は踏切が喚いていた。その間早苗も僕も無言だったに違いない。車の音と電車の音がやけに耳朶を打つ。
「な……なんですか？」
自然と言葉が出た。
「また、明日な？」
ロマンチックじゃない、もっと気の利いた言葉は出ないのか、僕

は。
「――はい、また明日……ですね」
早苗も少し戸惑ってる。ああ、僕は本当にアホだ。情けなくなって、こんな時だけ学校最速の俊足が役に立つ。早苗から逃げるように踏切の向こうへと駆け出した。

「ごめんね……」
聴こえない様に、届かない様に、伝わらない様に、早苗は言った。その言葉はオレンジ色の空に溶けて消えていった。
広一に吐いた最初で最後の嘘に、早苗は深い溜め息をゆっくりと、そして深く吐いたのだった。
「私を、許してね」
そして広一が駆け去って行った踏切の向こう側を見つめると、やがて長い緑髪を夕日に舐めさせて踵を返した。

早苗と別れたその翌日、諏訪大社が諏訪湖ごと消えた。
それと同じように、ここにあった、ありとあらゆる場所にあった、早苗の存在を示すものが消えた。
そして、諏訪大社も諏訪湖も東風谷早苗も、初めから居なかったように皆忘れていた。
ああ、なーんだ。と僕は一人呟いた。昨日が早苗とのお別れだったんだ。皆早苗の事を忘れて、僕だけが覚えている。そしてそれに抱いた心の中身は、ほんの少しの優越感と胸一杯の自己嫌悪だった。
だからと言って早苗の後を追うこともできなかった。ただの無力な学生でしかないのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8442n/

幻想は儚き彼女の為に

2010年10月8日14時11分発行